韓国薬学研修報告

加藤　志菜
薬学部2年 22A037

概要

2023 年8月7日～10 日まで韓国薬学研修を行った。2日目に漢陽大学校大学病院、韓方剤市場、韓方博物館、ソウル大学医学博物館を見学し、3日目に GC Biopharma 研究所、漢陽大学校薬学大学連携薬局、漢陽大学校薬学大学を訪問し、研修を行った。見学した施設の概要について報告する。

漢陽大学校大学病院

1972 年に開院した漢陽大学校大学病院の調剤室や臨床室を見学した。調剤室では、抗がん剤の調合などを行っていた。抗がん剤の調合は危険であるため、ドラフト内で行われ、使い捨ての防護服とマスク、手袋の着用がされていた。また臨床室では、薬物動態の研究や、温度や湿度の管理が必要な薬や重要な書類が金庫に保管されていた。指定された温度や湿度が変化してしまった場合は、すぐにアラームが鳴るように設定されていたり、停電時でも非常電源につながるように設定されているなど、徹底的に管理されていた。

韓方剤市場、韓方博物館

韓方剤市場では、茯苓、陳皮、猪苓など、様々な種類の韓方が販売されていた。日本では、韓方が市場で売っているところを見たことがなかったため、多くの韓方を市場で見ることができて新鮮であった。また、韓方博物館では、伝統医薬器具や特化薬剤を見学した。中でも、韓方を保管する棚である薬貯蔵器と生薬などを粉末にする石製薬研が印象に残った。

GC Biopharma 研究所

GC Biopharma はバイオ医薬品会社であり、約 2000 人の職員、20～30 人の薬剤師が働いている大きな製薬会社である。バイオ医薬品を作るのに大事な過程であるバイオプロセスでは、最適温度、最適湿度での細胞株の保存が徹底されていた。GC Biopharma には、OTC 医薬品を製造する工場、血液製剤を製造する工場、ワクチンを製造する工場がある。中でも現在は、ワクチン開発に力が入れられている。新型コロナウイルスの流行を通して、mRNA ワクチンの重要性を知り、次のパンデミックに備えて mRNA ワクチンを研究していると話していた。

漢陽大学校薬学大学連携薬局

韓国ではほとんどが院外処方であり、近年では、新型コロナウイルスの影響を受け、病院へ行く回数を減らし、感染拡大を防ぐことを目的に、1回で6か月～8 か月分の薬を処方することが多くあるとのこと。また、韓国では、一包化が当たり前となっていた。薬局長は、薬学の知識は勿論のこと、コミュニケーションが患者と接するうえで最も重要だと話していた。

漢陽大学校薬学大学との交流

漢陽大学では、お互いの大学生活、学習内容についてのプレゼンテーションや先生方による研究発表を行った。漢陽大学校薬学大学は各学年 30 人程度の学生で構成されており、入学が狭き門であるため、優秀な学生が多く、国家試験の合格率は 99%であるそう。部活動やサークルは本学同様、多くあり、充実した大学生活を過ごしていると話していた。プレゼンテーションの後は、漢陽大学の学生と食事をしながら韓国で流行していることや将来の進路などについて語り合った。

全体を通して

韓国薬学研修では、観光では訪問できない場所を訪問することができ、多くのことを学べる良い機会となった。韓国には、日本のように OTC 医薬品や日用品などを販売しているドラッグストアがなく、個人薬局を多く見かけた。日本とは反対に韓国では、OTC 医薬品よりも処方箋の薬が多く使われていた。私は、韓国語を話すことができなかったが、漢陽大学の学生と英語やスマートフォンの翻訳機能を使いながら会話をすることができた。この経験から、英語の大切さと互いの言語がわからなくてもコミュニケーションがとれるということを学ぶことができた。他にもこの研修を通して学んだことを今後の学習につなげていきたいと思う。

韓国研修に参加させていただけたことはとても貴重な経験となり、このような機会を与えて下さりました、大学関係の皆様に御礼を申し上げます。